



2016年 第65回神奈川県吹奏楽コンクール予選 第17回横浜吹奏楽コンクール

私たちがふと、高校時代を思い起こすとき。放課後の風景は、楽器の音色とともに蘇る。

— 暗い廊下の片隅で、友だちを探す階段で、おしゃべりに花を咲かせた教室で、部活動中の校庭で —
どこに居ても聞こえていたのは、チューニングから始まる、あの吹奏楽部の音。



7月25日（月）神奈川県民ホールで行われた県大会予選。

コンクールでは長らく、B部門（自由曲のみ・30人以下の編成）での出場が続いていた鶴見高校吹奏楽部だが、昨年・今年は2年連続で、A部門（課題曲・自由曲を演奏・55人以下の編成）での出場となった。

創部60周年を迎える歴史あるこの部は、どうやら近年人気の部活動になっているようだ。

母校の出演を楽しみに胸を躍らせつつ、全18校の演奏を表彰式終了まで、じっくりと鑑賞した。



以下、金賞校及び鶴見高校について（出演順・学校名—自由曲）

2・横浜隼人高等学校 — 楽劇「サロメ」より 七つのヴェールの踊り

サロメの妖艶な踊り、怪しさがよく表されており、オーボエとフルートのソロが印象的だった。

細かな表現力が素晴らしいと感じたが、ハーブを2台使ったことで、美しい響きがさらに増していたようだ。

6・県立港北高等学校 — 祈りとトッカータ

重低音から始まる非常に難しいリズムの曲を、よくまとめあげていた。フルートのメロディーが美しい。

金賞に決まった瞬間は、部員たちの悲鳴にも似た大歓声。素直な反応に、会場内も感動に包まれた。

8・横浜市立戸塚高等学校 — 吹奏楽のための風景詩「陽が昇るとき」より 陽光、衝動

なんという迫力！ffがffffffくらいに聞こえる。パーカッションの移動までも滑らか。聴衆を惹きつける演奏は、それまでの他校とは明らかに違い、会場全体からは割れんばかりの拍手が。客席では「うまい」という囁きが漏れるほどだった。

10・横浜市立横浜商業高等学校 — シダス

戸塚高校もだが、こちらもチューバの数が多いので、全体の重厚感が増し壮大な雰囲気。金管楽器の澄みきった美しい音は、満天の星空のキラメキを容易に想像させてくれた。盛り上がる終盤までの表現力は、さすが。

11・横浜創英中学・高等学校 — 宇宙の音楽

満席となった聴衆が「待ってました」と大拍手で迎えた。途中トランペット全員が立って演奏し、否応なしに盛り上げていく。メリハリのある演奏と高い技術。ちなみに、課題曲からして素晴らしい抑揚で、他校とはまるで違う曲のようだった。

14・県立横浜緑ヶ丘高等学校 — 交響詩「ローマの祭」より I、IV

祭というだけあって賑やかな曲調だが、その中でもトロンボーンが際立つ。上段に並んだトランペットのうち3人が途中から最前列右手に並んで立ち、高らかにファンファーレを奏でた。全体的に迫力とインパクトのある演奏となった。

15・横浜市立桜丘高等学校 — 歌劇「イーゴリ公」より ポーロヴェッツ人の踊り、ポーロヴェッツ人の踊りと合唱

「ダットン人の踊り」として親しまれている馴染みのあるメロディには、やはりつい、おっ！と反応してしまう。クラリネットが多いように見受けられたが、トータルとしてどのパートもバランスよく、しっかりとした力強さと安心感があつた。

16・県立川和高等学校 — シダス

ステージ上に各パートゆつたりと配置。ファゴットの音がよく響く。ハーモニックパイプを振って幻想的な音を出し、宇宙の神秘性を表現。終盤、木管から打楽器に移動して人数の少なさをカバーし、チームワークでの金賞獲得となった。

17・県立鶴見高等学校 — 序曲「春の猟犬」

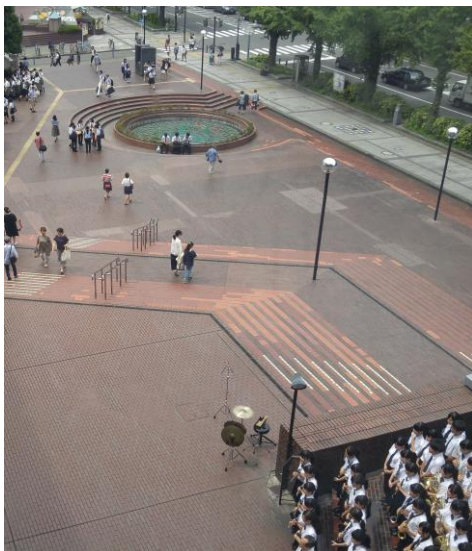
若い顧問の北田啓一郎先生と部員との距離が近いと聞いていたが、その良い関係を象徴するような、明るく軽快な自由曲。金管と木管のかけ合いでは、日々の練習の努力が垣間見られた。

荒削りながらも躍動感のある華やかな演奏に心を打たれたが、惜しくも銅賞にとどまった。

この結果を糧に、来年も強豪校がひしめくA部門で果敢に挑む姿を見せてもらいたい。

創部60周年記念演奏会の実行委員長、53期 原育海さんによると、今年の現役生の目標は『後悔しない』。

部員全員が力を出し尽くし、その目標は達成できたものと信じている。



表彰式に先立ち、大会実行委員長から、「説明会以降本日まで、18校のうち県大会出場は6校とアナウンスしてきたが、これは間違いで…8校です」と説明があり、会場は歓喜の声で大騒ぎとなった。「ダメ金」はなく、8校の金賞校すべてが、8/11(木)に行われる県大会に出場する。

最後に、神奈川県吹奏楽連盟副理事長の足立昭夫先生の挨拶があつた。
— 最近の日本で起きた自然災害。大きな被害に、まだ多くの人々が不自由な生活を強いられている。そんな中、このように舞台に立てることの幸せ、これは決して当たり前のことではない。自分たちがどれだけ恵まれているかを忘れてはいけない — 淡々とお話しになる先生の言葉に、思わず目頭が熱くなった。

また、「コンクールは結果が全てではない。大事なのは過程。今まで力を合わせて練習してきた活動を誇りに思い、胸を張ってほしい。

特に高3はこれでお終いと思わず、音楽は素晴らしいもの、
一生楽器を続けてほしい」

そう続けた先生の言葉は、本日出演したひとりひとりの胸に、
深く刻まれたことだろう。

(HP委員会・部活動支援委員会担当 36期 北川)

